

東海地方における近世曹洞宗本堂の研究（その5）

駿・遠・豆三国の17世紀までの遺構4棟について

杉 野 丞

Study on Main Halls of Sōdō Zen Sect in Tōkai District in Edo Period (Part. 5)

On Four Main Halls in 17th Century
in Suruga, Tōtōmi and Izu Districts.

Noboru SUGINO

On this thesis I took up Four Main Halls which were built in the 17th century in Suruga, Tōtōmi and Izu districts.

First I restored them to the original state. And I found that they took the same plan, which had unfloored corridor in front of the hall which consisted of eight rooms.

And I clarified the characteristics of this style in this districts and the development of these main halls in the 17th century.

1. はじめに

駿・遠・豆三国の中世における曹洞宗の伝播について概観すると、明徳元年（1390）に豊後の永泉寺から大通融土が駿河に入り、天台宗千葉山智満寺の三昧所を中興して深泉寺として曹洞宗に改宗したのが始まりと云う。しかし深泉寺が曹洞宗の拠点となることはなく、同宗の拠点は遠江、伊豆に置かれていった。遠江では、応永7年（1400）豊後泉福寺から洞巖玄鑑と弟子直伝玄賢が天竜川畔に雲巖寺（後の龍泉寺）、栄林寺を開創したのが始まりで、その後応永18年（1411）には遠州森の大洞院が怨仲天間によって開創され、ここに太原派の拠点が置かれ、後に東海一円に教線を伸してゆくことになる。また、駿河においては康正元年（1455）に葛股氏の外護を受けた石雲院が崇芝性岱によって開かれた。そしてこの石雲院の門下五派を輩出する頃に至っては今川氏の外護を受け、同氏の勢力伸長に伴って曹洞宗の教線を遠江、駿河に急速に伸してゆくことになる。しかし、駿河東部には日蓮宗の勢力がすでに確立されており、中世には駿河以西を中心とすることとなった。一方伊豆においては、応永元年（1394）相模の足柄山麓に最乗寺が開かれ、最乗寺門下春屋宗能が伊豆田方郡に草庵を造り、永享11年（1439）実山永秀により蔵春院が開かれて、伊豆に曹洞宗の布教が始まる。その後明応年間（1492～1501）には

石雲院の門下隆溪繁紹が北条早雲に招請されて伊豆に入り、修善寺を曹洞宗に改宗して、以来この一帯に曹洞宗が広まることになった。

このように曹洞宗の地方への発展は、一方の臨済宗が中央の権力に接近したのに対して、地方の中小の権力と積極的に結びつき、天台・真言等の古宗派の衰退寺院を同宗に改宗するなどして、近世初頭までに着実に教線を拡張していった。また近世に入ると、徳川幕府による諸宗寺院への施策が施され、慶長年間には家康の庇護を受けた遠江の可睡斎が下総総寧寺、武蔵龍穩寺、下野大中寺の関東三刹に並んで大僧録に任じられ、寛永6年（1629）にはこれら各寺院の下に五十ヶ所程の録所が定められ、中小の末寺を統率することとなり、江戸時代には宗門全体が組織、法制化されることとなった。しかしこうした中世から近世初頭にかけての曹洞宗の建築遺構は、近世初期の政変もあって皆無であった。

今回ここに取り上げた4棟の遺構は、いずれも宗門の本末関係も成立した17世紀に建立されたもので、共に前面土間8室型の平面形態を取ることで一致していた。しかもこうした例は、すでに知多市大祥院（寛永10・11、1633・34）、高山市素玄寺（寛永12・1635）（注一）、岡崎市龍溪院（明暦元・1655）（注二）等に見られ、建立年代も17世紀と略一致している。しかし、これら駿・遠・豆の三国のものが他の地方のものと異なる点は、尾張・

寺院建物名	建立年代	根拠	桁行×梁間(実長) 平面形態	土間・大縁境の柱 入側柱に架る部材 入側柱の間を通る部材	内陣正面の柱と組物 同内法装置 来迎柱と組物	所在地
釣月院本堂	天和2・1682	墨書	10×7.75(間) 前面土間8室型	入側柱 3 海老虹梁 大虹梁	正面丸柱・出組 中央(無)、両脇楣 来迎柱2・出組	相良町
安興寺本堂	貞享年間・ 1684～1687	古記録	9.5×7.1 前面土間8室型	入側柱 3 繫虹梁 大虹梁	正面丸柱・出組 虹梁 3 4本柱・出組	小笠町
興禅寺本堂	17世紀後半	様式	11×7.3 前面土間8室型	入側柱 3 繫虹梁・2スパン 無	正面丸柱・出組 中央・両脇・(無) 4本柱・出組	裾野市
保善院本堂	17世紀後半	様式	11×8 前面土間8室型	入側柱 3 角梁 無	正面丸柱・ 虹梁 3・ 来迎柱2・出三ツ斗	熱海市

表一 駿・遠・豆三国の17世紀までの遺構4棟

三河・美濃等の各地方ではこの17世紀に、この他前面土間6室型、6室方丈型といった中小の遺構が残されたのに対して(注一3)、この地方では前面土間8室型のもの以外の堂宇が残されていなかった点と、尾張・三河・飛騨等の各地では17世紀に限られていた前面土間8室型本堂が、18・19世紀に亘って残されている点である(表一1)。

そこで本稿では、駿・遠・豆三国の17世紀までの4棟の遺構について、各々の復原結果を基に他の地方の類例とも比較した上で、この地方の前面土間8室型本堂の特色を明らかにし、これら4棟の平面形態や各部意匠の変化を探ることによって、その後も継承されてゆく同形態の遺構での発展の方向を探りたい。

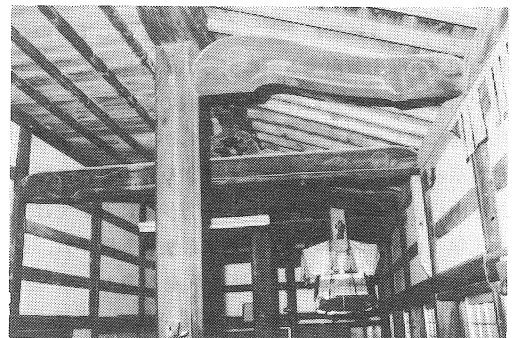
2-1 釣月院本堂 静岡県榛原郡相良町地頭方

創立は応仁2年(1468)とも文安2年(1445)とも云う。現在の本堂は、天正17年(1589)に再建され、天和2年(1682)に現地に移転したと云うが、堂内の虹梁等の絵様からは天正年間まで遡るとは考えられず、開山富田順耀和尚が延宝5年(1677)、二世中興月山吞海和尚が天和元年(1681)に没っており、しかも現本堂の来迎壁には「両親為菩提斯造建 施主 當村増田次兵衛 大工海老江村次部与右衛門 現住貴英代 音天和式壬戌年初夏吉辰」とあり、現本堂の建立は中興月山吞海和尚の手によるものであろう。様式的にも天和2年として大過ない。

本堂は、桁行実長10間、梁間8間弱、寄棟造棧瓦葺(元茅葺)、軒一軒疎垂木、南面建ちの堂である。平面は前面に土間、大縁を通し、奥に前後2列横4列の8室を構え、両側背面に落縁を廻した前面土間8室型の堂である(図一1)。土間、大縁巾は1間、1.25間とし、各室間口は大間3間半、上・下の間各2間、次の間2間半とし、前後

列の各室奥行を3間、2間半としており、この形態の本堂としては規模、平面ともこれまでに取り上げた遺構に類似している(注一1)。一方、現在前面の土間は板敷きとされ、次・次奥の間東側には巾半間の廊下が造られ、次・次奥の間の後方にも改造を受けている。

この堂の大きな特色は、前面土間、大縁の上部の扱いである。これまでに見て来た知多市大祥院(寛永10・11、1633・34)、高山市素玄寺(寛永12・1635)、岡崎市龍溪院(承応4・1655)等の各本堂では、土間、大縁境に他より太い入側柱を大間両端柱筋とその両脇に1乃至2本を立てて、上部の大桁を支え、この大桁により土間の化粧屋根裏と大縁の棹縁天井とを分けた。さらにこうした長スパンの大桁を支える各入側柱には、堂前面の柱とを結ぶ繫梁が掛けられた。ここでもこれら3棟と同様に、大間両側柱筋と上・次の間境の柱列に3本の入側柱を立て、柱上に舟肘木を載せて大桁を支え、この大桁の両端は両妻の垂木の落差を補うために彎曲させて両妻の軒桁上に載せ、両端の隅木もこの大桁上で受けている。しかしこの本堂が前述の3棟と大きく異なる点は、各入側柱上部から堂前面の柱に海老虹梁が渡され、さらに各入側



写真一1 釣月院本堂・入側柱上部虹梁

柱の間では土間、大縁を渡る大虹梁が、大間前面で2ヶ所この他に各1の計5ヶ所に架けられ、これら虹梁上には大柄な透し臺股、実肘木付きを置き、上部の大桁を支えている点である（写真-1）。こうした例は、特に駿河・遠江地方に見られ、この地方ではこのような類例が後世にも見られる。この他の本堂各室は、これまでの遺構とも大きな違いはなく、柱は内陣正面中央の2本と来迎柱を丸柱とする他はすべて面取り角柱を用い、堂前面では西端から4間目を1間半、東端を半間とする他は1間毎に柱を立て、各柱上には舟肘木を載せている。このような8室型の本堂では、大間、内陣が堂の中央より向って左に来るため、堂入口は建物の中心軸より左に寄ることになる。

ここでも堂入口は、中心より1.25間西に寄って、ここに敷居、差し鴨居を通して内側に両引戸を入れ、この両脇各1間を壁、この他では中敷居、鴨居・内法長押を通して障子2の窓とし、中敷居下を下見板張り、内法上を小壁としている。堂両側背面では、略1間毎に柱が立ち、両側面前端の柱間では、現在旧土間上部に敷かれた縁板に合わせて建具が入れられるが、これら各柱の相対面には土間より6尺程の高さに旧差鴨居の取り付け痕跡が残り、元はここを土間の通路として板戸2が入られたことが分かる。この他では、内陣背面を除き、柱間に敷鴨居、内法長押を通して障子2を入れる。堂内の前列各室正面では、大間正面で中央を1間半、この両脇を各1間とし、中央の内法上部に差し鴨居を通して障子4枚を入れ、上に格子欄間を挟んで虹梁を渡している。この他では敷鴨居、内法長押間に障子2を入れ、内法上小壁には飾り貫3本を通す。室部分では、特に室境の柱についてみると、大間両側と上・下・次奥の間前面で1間毎の柱配置を取る点に気付く。このような例は、高山市素玄寺に見られたが、後世室境に立つ柱は次第に取り除かれる傾向をもつ点からすれば古風な扱いと云えよう。このように各室境では略1間毎に柱を立てるが、次・次奥の間々口と後列各室の奥行を半間広げて2間半としたために半間の柱間も造っている。各室境では、敷鴨居、内法長押を通して、障子2を入れるが、内法上では、現在大間両側で天井より蟻壁を下し、竹の節欄間3を入れ、上・下奥の間正面でも各々異なった格子欄間を入れている（写真-2）。また次・次奥の間の間東側の半間内方に

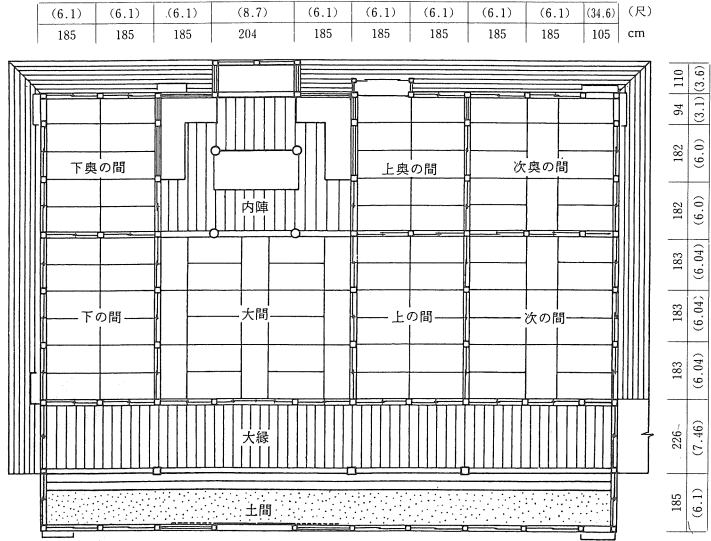


図-1 釣月院本堂 復原平面図

は、現在新たな柱列と間仕切りが造られ、次の間後方に4畳分の物置、次奥の間後方にも西に1間の床、東に押入れが造られるが、いずれも材は新しく後世の改造で、15畳と12畳半の次・次奥の間が復原される。また上奥の間背面では、内陣寄り1間の各柱相対面に框、板決り、各柱外面にも板決りの痕跡が残されており、元ここには書院が付けられていた。各室天井は、棹縁とするが、次奥の間ではつし天井を張っており、床は内陣を板間とする他はすべて畳敷きとする。内陣正面では、大間正面同様に柱間を3間とし、中央の各柱内法上部では相対面に虹梁の取り付け痕跡が残り、この両脇柱間内法には楣が残されて、いずれも下を開放としていた。これら正面柱上には頭貫、台輪を通して、柱前方に木鼻を出し、上に組斗拱、拳鼻、実肘木付きを載せ、中備詰組としている。これら正面丸柱の後方1間半の位置には来迎柱を立て、前に唐様須弥壇を置き、柱上に頭貫、台輪を通して

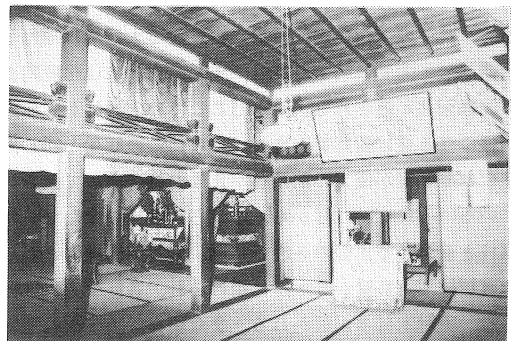


写真-2 釣月院本堂・大間・上の間境

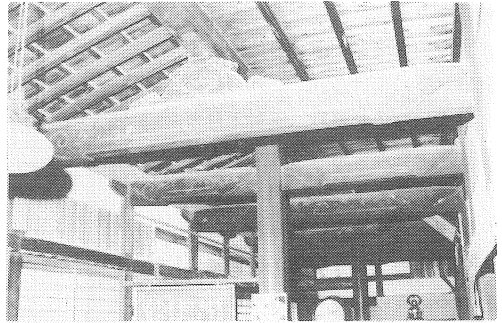
木鼻を前方と横の2方向に出す。柱頂には出組斗拱、拳鼻・実肘木付きを載せ、中備に裏股（上部平三ツ斗付き）を置く。また現在内陣の背面では、中央に間口1間半、奥行半間の仏壇が出され、東側面後半1間半にも壁に添って仏壇が造られている。しかし西側面の前より1間目の柱の内側には、東側面に付く仏壇と同様のものが取り付いたと考えられる痕跡が残り、しかも背面中央の前面の各柱には前方に向かって取り付く仏壇痕跡も残ることから、元は内陣両側面に付いた仏壇がL字型に折れて背面の両脇1間の位置にまで伸びていたと考えられる。

2-2 安興寺本堂 静岡県小笠郡小笠町赤土305-2

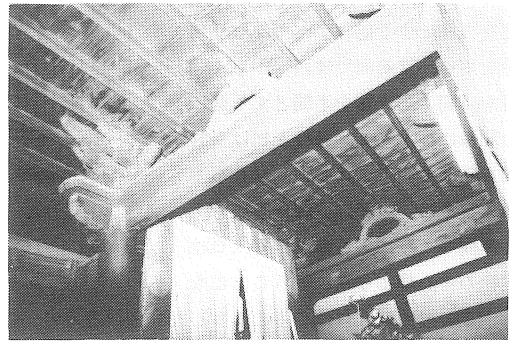
永正11年（1514）銀安道金居士の開基と伝う。現在の本堂は、寺記によれば「至七世大庵元広時距元和中興既六十餘年堂宇頗頽廢 元広乃發奮募化於諸檀至貞享年間改築本堂庫院新設寮寮山門鼎然新面目宏麗倍旧復称日中興現今殿堂即是也」とあり、元和年間（1615～1623）に中興した本堂を七世大庵元広和尚が貞享年間（1684～1686）に再建したものとなり、様式的にも首肯出来る。

この本堂は、前述した釣月院の近くに在って、その規模、平面、堂内の扱い等良く似た建物である。本堂は前面土間8室型で桁行実長9間半、梁間実長7間強、寄棟造茅葺（現在鉄板葺）、軒一軒垂疎木、南面建ちで、土間、大縁巾は1間、1間強とし、大間々口3間半、上・下の間々口各2間、次の間々口2間半とするが、次の間の東妻は半間の下屋となっており、堂両側背面には落縁を廻している（図一2）。現在前面の土間は入口の3間半を除いて縁板が張られ、内陣背面でも後方に拡張され、下奥の間背面にも僅かに改造を受けるが、全体によく保存されている。

この本堂の大きな特徴は、釣月院同様に土間、大縁の上部に大虹梁を用いる点と内陣正面の2本の丸柱と後方の来迎柱とを頭貫・台輪によって結び、4本柱を組む点である。まず土間、大縁部分の扱いであるが、入側柱はやはり大間両側柱筋と上・次の間境の柱筋の3ヶ所に立て、柱上に舟肘木を載せて大桁を支えている。ここに渡る4スパンの大桁の内、両妻に掛け渡る大桁端はやはり彎曲させて両妻軒桁上に載せ、土間、大縁には化粧屋根と棹縁天井が張られる。しかしここでは入側柱から前面側柱に渡る梁は繫虹梁とされ、さらにこの虹梁と同じ高さには繫虹梁が後方の前列各室正面の柱に向かって渡されている（写真一3）。しかも、これら入側柱の立たない外側柱と前列各室正面の各柱筋には、釣月院同様にこれらを直接結ぶ大虹梁が5ヶ所に掛けられ、各虹梁上には板裏股、実肘木付きが置かれる。また現在、上・次の間境の入側柱は除かれているが、上部の大桁には旧入側柱が



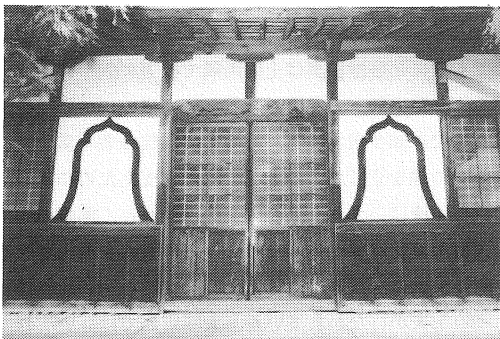
写真一3 安興寺本堂・土間・大縁上部虹梁



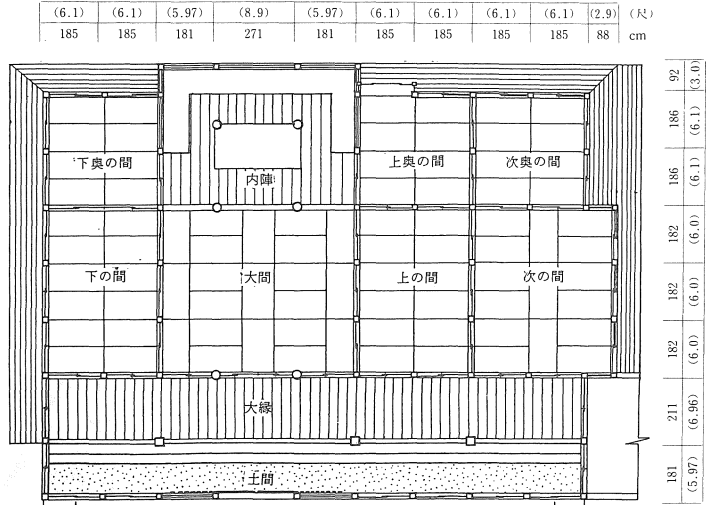
写真一4 安興寺本堂・内陣4本柱上部

取り付いた柄穴がはっきりと残る。このように土間、大縁部分の扱いは釣月院によく似るが、ここでは全体に木柄が太く、入側柱には後方にも繫虹梁が渡され、各虹梁端は堂正面の各柱の外側に木鼻となって出されるなど、意匠的にも一歩進んだものとなっている。また、もう一つのこの堂の特色は、内陣の扱いであるが、内陣正面では中央を1間半、両脇各1間の位置に粽付丸柱を立て、中央で内法を高く、柱間3間に虹梁を渡して、上部に板欄間を入れ、柱上部に頭貫、台輪を通し、柱上に出組斗拱・拳鼻・実肘木付きを載せて、中備に中央詰組、両脇間斗束を置き、さらにこの柱上部では、頭貫と台輪を後方に延長させ、この1間半後方に立つ来迎柱上に渡し、ここに4本柱が連結された点である（写真一4）。後方に延びた頭貫、台輪の中央上部には透裏股・実肘木付きが載せられ、これらの端は来迎柱後ろで木鼻と花頭形にされる。また来迎柱間にも頭貫、台輪が通され、両端に木鼻と花頭形を出し、柱上に出組斗拱・拳鼻・実肘木付きを載せ、中備に裏股を置いて、来迎柱前方には擬宝珠高欄付きの唐様須弥壇が出される。このように内陣に4本柱を組む例は、これまでも豊川市西明寺（寛文11・1671）（注一4）、額田郡一宮町妙劉寺（元禄5・1692）等に見られたが、このような遺構は三河、遠江の他にも駿河、美濃地方にも見られ、後世にもこうした類例は見る事が出来る。

本堂の各部は、釣月院とほぼ一致しており、堂前面の入口は建物の中心軸より西に1.25間寄って柱間1間半とされて、この両脇は真壁漆喰塗りとされ、真壁に花頭形の窓枠のみを見せる(写真一5)。この他では中敷居と鴨居を通して障子2の窓を造り、外に雨戸を引いて、柱上には舟肘木を載せる。堂両側面では、土間両妻は元通路として板戸2が入り、大縁両妻には杉戸各2が入る。また下・下奥の西側面と次奥の東側面には障子2を引いたようであるが、この他の各室側背面では鴨居に3本溝が残され、元は板戸2、障子1を入れていたことが分かる。一方大間正面では、釣月院より遙かに仏堂の意匠に変わっている。釣月院では正面中央に角柱を立てて、上部に虹梁を渡すのみであったが、ここでは中央に粽付丸柱を用いて、内法上に虹梁を通して下には建具を入れ、柱上部に頭貫、台輪を通してこれを両脇の角柱にまで延長し、柱上には出組斗拱、拳鼻・実肘木付きを載せ、中備に板葎股、実肘木付きを置いて、両脇の角柱にも葎股の左右半面ずつを添えている。また室部分では、各室境の柱が釣月院では、大間両側や各奥の間正面中央にも1間毎に立ったが、ここでは下・下奥の間境で柱が消失している点に気付く。これら各室境では、内陣正面を除きすべて建具が入れられる。大間両側では、釣月院同様に現在天井から小壁を下して、竹の節欄間3を入れ上・下奥の間各正面でも内法上に上奥で亀甲欄間、下奥で箴欄間を入れている。天井は各室共に棹縁天井とするが、大間に張られた格天井は当初のものの可能性が高い。次の間では、半間分間口を外に広げて下屋をとりこみ、東側の梁行は次奥の東側面とは一致しないが、これは当初から計画されたようで、現在この次の



写真一5 安興寺本堂・堂前面入口部分



図一2 安興寺本堂 復原平面図

間上部の天井には煙出しの小天井が上げられており、この室には囲炉裏を用いた時期があるようである。次奥の間には低い天井が張られるが、こうした例はこのような8室型本堂には多く見られる。また上奥の間背面では、内陣寄り1間に書院が付き、これは上奥が当初より住職の執務の室に当てられていたためであろう。一方下奥の間背面では、現在内陣寄りに1間の床、西に便所が造られるが、いずれも後補で、内陣境に通る長押には留めの仕口も残ることから、元は内法に長押も通って戸口であったと考えられる。また内陣背面では、現在両脇に土地壇、祖師壇が祀られるがいずれも後補で、堂背面の柱列より半間後方の各柱外面には風蝕が残され、各柱相対面には壁貫の痕跡が残ることから、元はここが内陣の背面となる。さらに内陣両側では、前より1間後方の各柱相対面に改造を行なった仕事の痕跡を隠すための板が打たれており、ここには釣月院同様の仏壇框が取り付け、元は両側背面の壁を利用した凹字型の仏壇が造られていたと考えられる。

2-3 興禅寺本堂 静岡県裾野市深良1110

2-4 保養院本堂 静岡県熱海市泉136

興禅寺は、元真言宗であったものを永禄年間(1558~1569)に大森信濃守氏頼を開基、揚天宗播和尚(永禄12・1569没)を開山として曹洞宗に改宗されたものである。本堂は安政年間に地震に遇って倒壊したと伝えるが、いずれの際も旧材を利用して再建しているようで、様式的にみても17世紀の建立としてよい。

保養院は、小田原城主大森氏頼と泉の佐藤信頼が壇越となり、嘉吉元年(1441)に安叟宗楞和尚を迎えて開山

とし創立したと伝える。元文2年(1737)の棟札が残されており、それによると本堂は13世国泰和尚(寛永3・1626没)によって再建され、元文2年までに162年を経ていると記す。すると天正3年(1575)に建ったことになるが、様式的にみて17世紀頃の再建と考えられ、元文の修理もかなり大きかった様子である。

興禅寺、保善院の各本堂は、いずれも前面土間8室型をとり、規模・平面共に略一致するので、この2棟を共通に論ずることにしたい。この2棟は、共に桁行実長11間、梁間7間強(保善院は8間弱)、寄棟造茅葺(現在興禅寺は葺瓦葺、保善院は入母屋造)、南面建ちの堂で、土間の巾は略1間、大縁の巾略1間強(保善院8.6尺)とし、各室間口も大間3間半、上・下の間2間半・2間、次の間3間と一致し、各室奥行も前列は共に3間、後列は興禅寺2間、保善院2間半とするなど非常に良く似た建物である(図-3、図-4)。また興禅寺では、現在入口の5間程を除き旧土間に縁板が張られ、次奥の間と下奥、内陣背面に改造を受けているものよく保存されている。一方保善院では、後世の屋根替えの際に軒を二軒半繫垂木とし、本堂前面の柱列を改め、正面中央に向拝を付し、堂内でも旧土間には縁板を張り、各室の天井も張り替えるなど大幅な改造を受けている。一方これらの軸部柱は、共に内陣正面と来迎柱を丸柱とする他はすべて面取角柱を用いている。堂前面では、いずれも西端から4間目を入口とし、柱間を1間半にとり、内側に両引戸を吊っており、この他では1間毎に柱を立てて、中敷居、鴨居、内法長押を用いて窓を造り、各柱上には舟肘木を載せており、こうした前面土間8室型本堂では、前2棟の遺構も含めて堂前面の柱間装置は略一定している(写真-6)。堂両側背面では、柱間に敷鴨居、内法長押を通して障子2を入れ、外には雨戸を引き、土間、大縁の両妻には板戸各2を入れるが、土間両妻では内法に差鴨居を用いている。土間、大縁境では、前述の釣月院、安興寺同様に大間両端柱筋と上・次の間境柱筋の3ヶ所に他より太い入側柱を立て、直接大桁を支えており、これら上部には、4スパンに大桁が渡り、両脇の大桁両端は彎曲して両妻の軒桁上に渡されている。各入側柱上部では、興禅寺では安興寺同様に繫虹梁が前後梁行に2スパンに掛けられるが、入側柱の立たない部分に渡される大虹梁は用いていない(写真-7)。一方保善院では、現在入口を建物の中心軸上に移したため、大間、上の間境に立つ入側柱を1間西に移し、中央に移された入口には向拝を付けるなどの改造も多いが、この保善院では当初から両脇の入側柱上部でのみ前方に角梁を伸したようで、虹梁等は一切用いていない(写真-8)。土間、大縁の天井は、共に化粧屋根裏と棹縁天井を張るが、前2棟と同様にこ



写真-6 興禅寺本堂・全景



写真-7 興禅寺本堂・入側柱上部繫梁



写真-8 保善院本堂・入側柱と繫梁

こでも共に化粧屋根裏は土間両隅で後方に鉤形に曲げている。また土間、大縁境の入側部分の扱いについては、これまでに知多市大祥院、岡崎市龍溪院の各本堂では、入側隅に柱を立ててこの上部で隅木を支えたのに対し、これら4棟はいずれも隅の入側柱は除かれ、両端の隅木も大桁上で受けている。このような入側柱を消失させる傾向は後世にも続き、次第に土間、大縁の空間を広げるための工夫が行なわれていく。大間正面では、いずれも中央1間半、両脇各1間とし、中央で内法を上げて虹梁

（保善院では楣）を渡して下には建具を入れる。この他の前列各室正面では、1間毎に柱を立てて敷鴨居、内法長押を通して建具を入れる。大間両側では、興禅寺では現在大梁を渡しているが、これは後世の改造で、元は1間毎に柱を立てて内法下に建具を入れ、内法上にも現在上・下奥の間正面に残される箴欄間に類するものがここにも用いられたであろう。一方保善院では、ここには柱は立てず、内法上3分点に釣束を用いており、元はここにも欄間が入り、下には建具4枚を入れている。これらの室内は、各室境で内陣正面を除き、敷鴨居、内法長押を通して建具を入れる点は、これまでの遺構とも一致するが、室境に立つ柱には変化がみられる。天和2年（1682）の釣月院では各室境すべてに1間毎の柱を立てたが、貞享年間（1684～1687）の安興寺では下・下奥境で柱が消失し、17世紀末の保善院では、これに加えて上・上奥境、さらに大間両側の各柱を消失させている。こうした傾向は、室内の前後の2室或いは大間両脇の2室等を同時に開放して用いる場合には、明らかに不都合であったはずで、こうした各室境の柱の消失の傾向は後世にも続き、こうした変化は各室の使い方の変化によるものであろう。その他、上奥の間では興禅寺で背面の内陣寄り1間に書院を出しており、前2棟とも一致する。しかし保善院では、内陣境の後方1間半に東向きの床の間を付けており、こうした例は後世にいくつか見られる。次・次奥の間では、共に前2棟より半間広く取ったためか、興禅寺では2室に比較的高いつし天井を張っており、（現在次奥は新材を張る。）保善院ではここに共に高い棹縁天井が張られている。また下奥の間背面では、前2棟がいずれも柱間2間の戸口としたのに対し、興禅寺では元西に1間の床、東に1間の押入れを設け、保善院でも元は間口2間の床乃至仏壇を設けたと考えられる。こうした下奥の間の変化は、次第にこれらの室が本寺住職や壇越の来訪の際にその接待に用いられたことによるものであろう。内陣正面では、

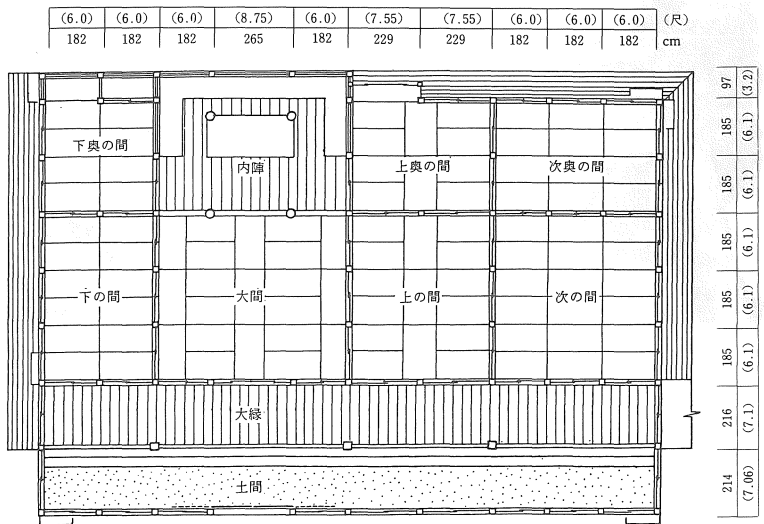


図-3 興禅寺本堂 復原平面図

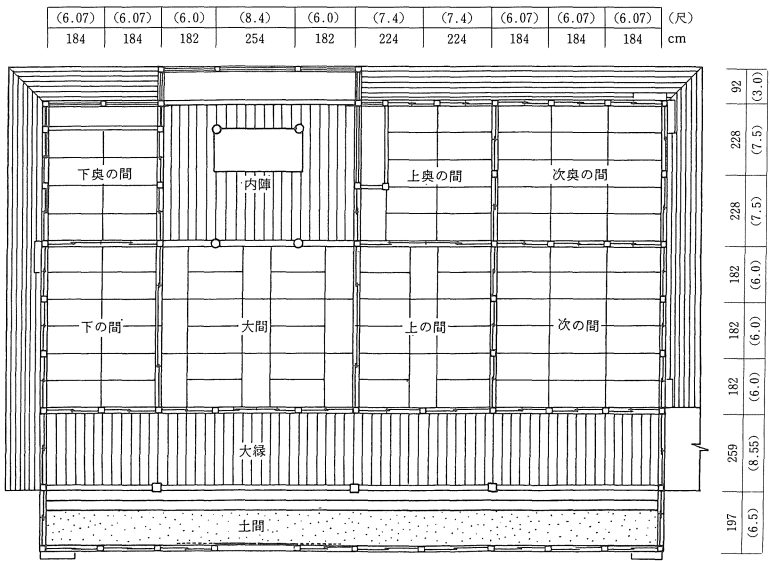
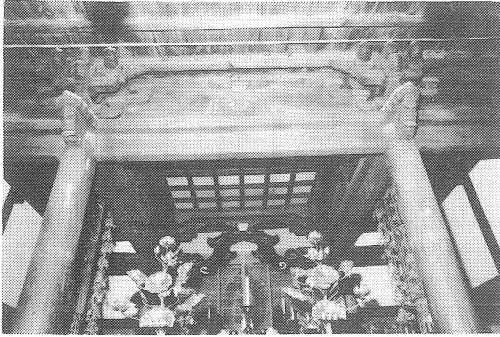


図-4 保善院本堂 復原平面図

いずれも中央に粽付丸柱を立てるが、興禅寺では柱上に頭貫、台輪を通すが、内法には横架用を用いず、柱間3間共頭貫下を開放に扱って、柱上には出組斗拱・拳鼻・実肘木付きを載せ、中備に板葺股を置いている。さらにここでは、安興寺にみられたように柱上の頭貫、台輪を後方に延長し、1間半強後方の来迎柱に結び、ここに4本柱を組んでいる（写真-9）。これら梁行の頭貫、台輪端は内陣前面の丸柱前方で木鼻と花頭形となって出され、後方に伸びた台輪中央上部には間斗束が置かれ、この4本柱に囲まれる部分には格天井が張られる。後方の来迎柱上部では、やはり頭貫、台輪を通して両端に木鼻

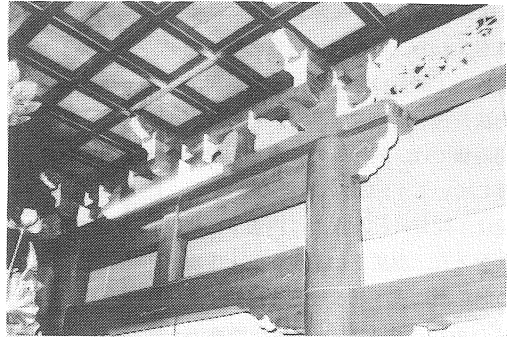


写真—9 興禅寺本堂・内陣4本柱部分

と花頭形を出し、柱上には出組斗拱・実肘木付きを載せるが、来迎柱間では、現在臺股状の大柄の部材を入れて、派手に飾っているが、これは明らかに後補で、元は中備臺股程のものであったろう。さらに来迎柱前方には擬宝珠高欄付きの唐様須弥壇が置かれる。一方保善院では、内陣正面に粽付丸柱を立て、中央柱間で内法を上げ、両脇で内法高に虹梁を渡し、いずれも虹梁端には持ち送りを添えて、各虹梁の上・下は共に開放に扱っている。中央の丸柱上部には頭貫、台輪を通して端を木鼻と花頭形とし、柱上には出三ツ斗・実肘木付きを載せ、中備に間斗束笈形付きを置く(写真—10)。またここでは内陣の奥行が2間半と深くとられたために、来迎柱も内陣前面より2間後方に立てられ、柱上に出三ツ斗・実肘木付きを載せ、中備臺股とし、来迎柱両脇の角柱とは、内法で繋虹梁により結ばれ、来迎柱前方には擬宝珠高欄付きの唐様須弥壇が置かれる。内陣に張られる格子天井も当初のもの可能性が強い。内陣背面では、現在いずれも後方の開山堂に通ずる後門が開かれるが、興禅寺では前2棟同様に内陣両側面の前より1間目の各柱相対面に仏壇框の取り付け痕跡が残り、しかも内陣の後方2間半の柱列には壁貫の痕跡が残され、元はこの位置を内陣背面としていることから、ここでは安興寺同様に内陣両側背面の壁を利用した凹字型の仏壇が復原される。一方保善院では、内陣の両側に仏壇を付した様子は無く、内陣背面に半間の下屋を出して、ここに一直線仏壇を設けたようである。

3. 結び

以上4棟は、当地方の17世紀までの遺構としていくつかの特色を示した。その一つは、土間、大縁部分の扱いで、釣月院、安興寺では、大間両端柱筋と上・次の間境柱筋の3ヶ所に立つ入側柱の上部に前方或いは前後に繋虹梁を渡し、しかもこれら入側柱の間には各柱筋に土間、大縁を渡る大虹梁が架かり、虹梁上には大柄な臺股を載



写真—10 保善院本堂・内陣正面中央上部見返り

せるなどして、この土間、大縁を堂内の一つの見せ場とした点である。またこうした例は、17世紀までの他の地方には見られなかったもので、駿遠地方に限られるが、こうした類例も後世には、他の地方にも見出されている。さらにこれら4棟は、これまで知多市大祥院、岡崎市龍溪院などで入側通り両隅に柱を立てたのに対し、大間両端と上・次の間境各柱筋の3ヶ所に入側柱を立てて、上部に4スパンの大桁を掛け、この内両脇の大桁両端は曲り梁とされて両妻軒桁上に載せるなど多くの共通点をもつ。また一つは軸部柱の扱いで、こうした方丈を基本とした邸宅的な建物では、堂内外共に略1間毎に柱を密に立てることを原則とし、前に扱った寛永12年(1635)の高山市素玄寺、或いはここに取り上げた天和2年(1682)の釣月院、17世紀末の興禅寺などでもそうした原則を守っていた。しかし貞享年間(1684～・87)の安興寺では、まず下・下奥の間境の柱が消失し、17世紀末の保善院ではこれに加え、上・上奥の間境、さらに大間両側面でも2本の柱が釣束に代えられるなど、各室境の柱は次第に取除かれる傾向にある。また、こうした住宅的な装いを強く留める中で、近世曹洞宗本堂では早くから内陣にのみ仏堂的な意匠を用いる点が大きな特色とされたが、そうした特徴もこれら4棟には示されている。更にここでは安興寺、興禅寺が、内陣正面の2本の丸柱と後方の来迎柱とが、頭貫と台輪によって結ばれ、ここに4本柱を組んでおり、同様な例はこれまでも豊川市の西明寺等にも見られたが、こうした類例が三河のみならず遠江、伊豆地方にまで広く分布することが認められた。またこの前面土間8室型本堂は、これまでに他の地方では17世紀前半に限られていたのに対し、駿・遠・豆の三国では、18世紀から19世紀に亘って建てられており、これらの地方ではこの形態の本堂の発展を追求ことが出来ると考えられる。また、今回ここに示した4棟の遺構からも、土間、大縁部分には2つの扱いがみられる。一つは保善院にみられるように、入側柱には虹梁を渡さず、

次第に入側柱も除いて、元来化粧屋根裏であった土間天井にも棹縁を通すなどして、この土間・大縁を一つ空間にまとめてゆこうとするものと、また一つは釣月院、安興寺にみられたように、入側柱を軸に虹梁を掛け渡し、入側柱の間にも大虹梁を架けて曇股を置き、この土間、大縁部分を誇張しようとする2つの流れが同時に継承されてゆく点に気付く。

（注一） 拙稿「東海地方における近世曹洞宗本堂の研究（その3）大祥院本堂 素玄寺本堂」愛知工業大学研究報告 No.17, 1982.

（注二） 拙稿「東海地方における近世曹洞宗本堂の研究（その1）龍溪院本堂」愛知工業大学研究報告 No.15, 1980.

（注三） 拙稿「東海地方における近世曹洞宗本堂の研究（その4）尾張・三河・美濃地方の17世紀ま

での中型本堂について」愛知工業大学研究報告 No.18, 1983.

（注四） 拙稿「東海地方における近世曹洞宗本堂の研究（その2）西明寺本堂」愛知工業大学研究報告 No.15, 1980.

【参考文献】

- 1) 鈴木泰山「禅宗の地方発展」吉川弘文館, 1983.
- 2) 横山秀哉「禅宗建築の研究」東北大学建築学報に掲載された一連の研究, 1952~1957.
- 3) 横関了胤「江戸時代 洞門政要」東洋書院, 1977.
- 4) 静岡県教育委員会「静岡県の近世社寺建築—近世社寺調査報告書一」1978.

（受理 昭和59年1月17日）